

【ポスター発表】

主題: 地域在住高齢女性の要介護期の医療と生活に関する意思形成

—副題: 高齢者自身の介護についての語り合いから—

○ 湘南鎌倉医療大学 氏名 川喜田 恵美 (009330)

キーワード: 要介護期, 意思形成, 語り合い

1. 研究目的

地域在住高齢者が高齢者同士で語り合う中で、老いを受けとめ、要介護期と終末期にどのような医療を受け、どのような生活をしたいのかという意思を形成していくプロセスとその要因を明らかにすることである。今回は予備調査の第2回目のテーマである「要介護期の医療・生活に関する受けとめや要望」として、1) 高齢者が老後や介護についてどう考えているのか、介護の希望はどのようなものかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

1) 研究デザインと研究の問い

本研究の視点・問いは、(1) 地域在住高齢者の老後の過ごし方や人生設計はどのようなものか、(2) 高齢者の老後の不安はどのようなものであり、関連する要因は何か、(3) 高齢者は介護についてどのように考え、希望や要望があるのか。また子どもには介護についてどのように伝え、話し合っているのか、(4) 高齢者は介護保険に関する認識と理解度はどの程度か、(5) 高齢者は施設入所および地域で生活することについてどのように思っているのか、またどのような方法を検討しているのか、とした。

2) データ収集

(1) 調査対象・方法

調査対象者はA県B町のシニアボランティアとして活動している高齢者に対して、B町の社会福祉協議会に研究協力と対象者の選定を依頼し、研究同意の得られた5名とした。

(2) 調査期間

平成28年9月～同年11月

(3) データ収集方法

研究参加者全員に基本情報質問紙にてアンケートを実施後、第2回目のテーマである「要介護期の医療・生活に関する受けとめや要望」について自由に自主的に語り合ってもらった。語り合いは、社会福祉協議会の施設で、1回約90分間とした。

毎回、語り合い終了後に、感想・意見の記入を依頼した。話し合いの際には、参加者の同意を得て、音声の録音とメモを取り、終了後ただちに逐語録を作成した。

3) データ分析

(1) 量的データ: 基本情報質問紙の回答を量的データとして記述統計を行い、質的データ収集時の参考にした。

(2) 質的データ: 逐語録から問いに関するデータを抽出して内容分析を行った。分析方法はGraneheim & Lundman (2004) の質的内容分析の方法を参考にした。まず、語りの明示的内容に関する分析を行い、カテゴリーを抽出したあと、それらに関係づけて領域としてまとめ、全体像の構造を明らかにした。なお、分析に当たっては老年看護の教育・研究者および老年看護の専門的実践家から助言やスーパーバイズを受けた。

3. 倫理的配慮

社会福祉協議会から紹介を受けた語り合いの参加候補者に対して、研究の目的、実施方法、結果の公表方法、倫理的配慮について口頭および文書にて説明し、協力の同意を得て研究を実施した。本研究の研究計画は、研究者が所属していた大学院の倫理委員会の審査を受けて承認（長野県看護大学：承認番号 2016-6）を得た。

4. 研究結果

「要介護期の医療・生活に関する受けとめや要望」をテーマとして語り合いを実施した結果、119のコード、62のカテゴリーから22の領域が抽出された。この22の領域は、自身の【老いの認識】を元に、【最終段階の人生設計】、【老後のあり方】が形成され、その中で【老後の不安はお金と孤独と家の始末】がみられた。その不安には、【この先の医療の必要性】、【自分事として捉えられていない介護】、【介護保険制度の理解不足】、【施設は選択の余地なし】、【施設にまかせるしかない】、【家族制度の復活願望】、【子どもとの距離】があり、そしてこれらは【親の子どもに対する介護認識】、【子どもの親に対する認識】と結びついていた。親の介護認識は、【できれば施設には入所したくない】、【地域で生ききる方法の模索】があり、それは【家族以外での助け合い】、【地域で生ききるための介護保険の活用】が関連していた。そして親の介護認識と【子どもの親に対する認識】からは、【介護の大変さ】、【最後の受け皿は施設】、【子どもも安心する良い施設へ入りたい】、【施設ケアに関する要望】につながっていた。最終的には、【子どもに今後のことを伝えたい】が抽出された。

5. 考察

「要介護期の医療・生活に関する受けとめや要望」の語り合いからは、まだ健康で介護も受けていない地域在住高齢女性は、老いの認識も良いイメージで、このまま老いを維持していくことを中心に考え、それは最終段階の人生設計や老後のあり方にも関連し、漠然としていた。しかし、そのような中でも、孤独や経済的な困窮、介護に関して不安を抱えており、その要因となっているのが、この先の自分の老後が予測困難であること、介護を自分事として捉えていないこと、介護保険の理解が乏しい、施設に関する負のイメージから、十分に検討することができていなかった。また、本来は頼りにしたい子どもとは住む場所が離れ、住まいも異なることから、それぞれの生活スタイルが確立され、長年それぞれの価値観や認識が形成され、お互いの考えを摺り合わせていない状況がみられた。

2回目である高齢者同士の語り合いは、これから老後や介護について、まだ一度も配偶者や子どもに話したことがないことに気づかせ、子どもらに老後や介護に関する考えや要望を伝え、話し合いをする必要性を感じてもらうことにつながっていた。今後は高齢者の望む介護のあり方を実現するために、より介護を自分事として捉え、介護保険に関する理解を深め、具体的に地域でできるだけ長く住むためのイメージを高齢者自身が形成し、この先の介護について前向きに捉え、行動に移していける支援を検討することが課題である。